

シェイクスピアの〈目〉のイメージに関する研究 (2)

鳴 島 史 之

(昭和63年4月30日受理)

A Study on Shakespeare's Eye Imagery (2)

by Fumiyuki NARUSHIMA

Shakespeare often associates the tongue with the eye. I discuss how this association took place and argue that, in the *Sonnets*, these images are connected by means of book imagery. Shakespeare writes that books talk to people through tongues, and this imagery seems to have been the origin of his association.

I also take up the word *tongue-tied* and explain how *tongue* and *eye* are connected through the sound [ai]. I investigate all the instances of [ai] in the earlier sonnets, and point out how Shakespeare was influenced by the sound [ai] when he used the word *eye*.

第二節 「目」と「舌」

1.2. *tongue* という語がしばしば *eye* のそばに現れる。*Sonnets* に *tongue* は 11 例, *tongues* は 4 例, *tongue's* 1 例, *tongue-tied* が 4 例, 計 20 例登場するが, そのうち *tongue* 5 例, *tongues* 3 例, *tongue's* 1 例, *tongue-tied* 1 例の計 10 例が *eye* と同じソネット内に現れる。*tongue* を *eye* に近づける要因はいったい何だろう。*tongue* が最初に *eyes* のそばに出て来るのは 17 番で, ここでの両者のつながりはある程度理解できる。

If I could write the beauty of your eyes,
And in fresh numbers number all your graces,
The age to come would say, "This poet lies,
Such heavenly touches ne'er touch'd earthly faces."
So should my papers (yellowed with their age)
Be scorn'd, like old men of less truth than *tongue*,
(5-10)¹⁾

“lies”の意味は「嘘をつく」であり, 明らかに *tongue* との関係が見てとれる。それではいつもこのように「嘘をつく」の意味の *lie* がそばにあるときだけ *tongue* は *eye* と近づくのだろうか。実際に *lie* が *tongue* の近くにあるのは, この 17 番を含めて三例しかなく, しかも

そのうちの一例には *lie* に「嘘」の意味はない。「嘘」の意味の *lie* が *tongue* のそばにあるのは 17 番と 138 番 (138 番に *eye* は現れない) の二回しかないことになる。*lie* と *tongue* の意味的むすびつきはさほど強くなさそうだ。

それでは *tongue* と *eye* とのむすびつきの理由を他に求めなければならないが、ひとつの考え方として、例えば、Spurgeon は次のようにその理由を規定する。

There are, of course, several other groups of ideas which recur together, but some of them ... are so apparently unrelated that it is difficult to trace more than a thread of meaning in them. Such a group is the association of death, cannon, eye-ball, eye-socket of skull (a hollow thing), tears, vault, mouth (sometimes teeth), womb, and back to death again²⁾.

ここには第一節において筆者が分析した *death* と *eye* とのつながりの理由もほのめかしてあるが、その問題はさておき、Spurgeon はこの一連のイメージのつながりの中に、「墓穴」や「子宮」といった空洞のイメージが支配的であると見てとっているのである。そして次の頁で *tongue* をこのイメージ群に含めている。

In *King Lear* we find the sequence, *tongues (mouth), eyes vault and death ...*³⁾

Spurgeon は *King Lear* の一例しか挙げていないが、その考え方は明らかである。すなわち、彼女は、「目」や「口」などの損失がもたらす骸骨のような空洞を前提にしているわけで、それが「墓穴」あるいは「子宮」といったものとの共通性をもっていると考えているのだ。確かに骸骨的なものを考えることは悪くないが、そのみを前提にたててしまうことは少し危険な気がする。

われわれが第一節において分析したのは、もっと広く音韻的な問題をも含めたところでの *eye* と *death* の関係であった。Time the Reaper のようなもの (多分骸骨であろう) のイメージが支配的であったとしてもそれのみでイメージのつながりが説明できるとは、考えない方がよいのではないだろうか。

つまり、必ずしも空洞的イメージが伴わない時でも *tongue* が *eye* の周辺に現れる場合もあるのである。もうすでに一度引用したが、81 番をとりあげてみよう。

Or I shall live your epitaph to make,
Or you survive when I in earth am rotten;
From hence your memory *death* cannot take,
Although in me each part will be forgotten.
Your name from hence immortal life shall have,
Though I (once gone) to all the world must *die*;
The earth can yield me but a common grave,
When you entombed in men's *eyes* shall *lie*;

Your monument shall be my gentle verse,
Which *eyes* not yet created o'er-read,
And *tongues* to be your being shall rehearse,
When all the breathers of this world are *dead*;
You still shall live (such virtue hath my pen)
Where breath most breathes, even in the *mouths* of men.

“*tongues*”そして“*mouths*”がここで空洞の意味をもっているとは思われない。むしろここでは“*tongues*”は情報を伝達する重要な器官であり、その「損失」よりもむしろ「働き」が前提されているのである。Spurgeon が言うように *tongue* が *mouth* という空洞にあるから意味をなすのではなく、*tongue* はその独自性の故に存在しているのであって、*mouth* の空洞性に意味を頼っているのではない。

従って、Spurgeon の説明は一応示唆に富んでいることは認めたとしても、それはとりあえず省いておいて、それ以外の問題点を洗い出すことからはじめてみよう。

1.2.1. *tongue* のどういう特徴が最も Shakespeare に働きかけ、どういうイメージを *tongue* に見るときに *eye* と共に使うのかをはっきりさせる必要があるので、すべての *tongue* を見てみよう。*tongue* が何の「舌」であるかを以下に示す。書物に関係したイメージがあらわれるものはイタリックにした。

17	<i>tongue</i> (10)	<i>eyes</i> (5)	old men (10) しかし直接には my papers (9) の「舌」。 lies (7)
23	<i>tongue</i> (12)	<i>eyes</i> (14)	that tongue that more hath more express'd (12) その意味するところは my books (9) の「舌」。
66	<i>tongue-tied</i> (9)	die (14)	art (9) おそらく censorship が話題になっているので、書物の「舌」。
69	<i>tongues</i> (3, 6)	<i>eye</i> (1, 8) <i>eyes</i> (11)	世間の人々の「舌」。 <i>tongues</i> の擬人化の度合いはさらに深まり、「舌」が「目」を持つ。 ⁴⁾
80	<i>tongue-tied</i> (4)		when I of you do <i>write</i> (1)
81	<i>tongues</i> (11)	<i>eyes</i> (8, 10) die (6) lie (8)	<i>tongues</i> to be (11) すなわち未来の人々、ただし <i>eyes</i> not yet created shall <i>o'er-read</i> (10)
85	<i>tongue-tied</i> (1)		My <i>tongue-tied Muse</i> (1)
89	<i>tongue</i> (9)		in my <i>tongue</i> / Thy sweet name no more shall dwell (9-10)
95	<i>tongue</i> (5)	<i>eyes</i> (12)	that tells the story of thy days (5)
102	<i>tongue</i> (4, 13)		rich esteeming (3-4) を持つ人。

		my tongue (13)	
106	<i>tongues</i> (14)	eye (6)	<i>tongues to praise</i> (14) ただし <i>chronicle</i> (1) から書物の文脈は明らか。
		eyes (11, 14)	
122	<i>tongue</i> (6)		<i>your tongue</i> (6)
127	<i>tongue</i> (14)	eyes (9, 10)	<i>every tongue</i> (14)
138	<i>tongue</i> (7)	lies (2, 14)	<i>her false speaking tongue</i> (7)
		lie (13)	
139	<i>tongue</i> (3)	eye (3, 6)	<i>thy tongue</i> (3)
140	<i>tongue-tied</i> (2)	eyes (14)	<i>My tongue-tied patience</i> (2)
141	<i>tongue's</i> (5)		<i>thy tongue's</i> (5)
145	<i>tongue</i> (6)		<i>that tongue</i> (6)

初期のソネットの *tongue* がほとんど書物に関係しているのにくらべて、“dark-lady” sonnets ではその mistress 自身の舌になる。

書物が舌を持つというイメージはまさしく「目」と「舌」を融合させるもので、この二つの語のつながりを示唆してくれる。Shakespeare の初期の発想の中にこういうイメージがあるということは、ひとつの大きな発見である。

いずれにしても、「書物」という、本来「目」に情報を送るものが、「舌」を持つというイメージは、視覚・聴覚の両方をイコール関係でむすぶことに役立ち、ひいては *tongue* と *eye* をむすびつけることに力を貸していることは確かである。

1.2.2. *tongue* 自体の韻の問題はどうだろうか。*tongue* は何度か *wrong* や *young* と押韻するが、どうも大きい問題に発展するようには思えない。そこで、*eye* を中心にした音から考えてみると、どうも気になるのは、*tongue-tied* という語の存在である。Spenser も Marlowe も Sidney も使っていないこの語を Shakespeare はどういうところで使うのだろう。*tongue-tied* が何かの語と押韻するのは残念ながら見つからないが、筆者が引き付けられるのは、[ai] という音のためである。この語を Shakespeare は生涯に 12 回使うが、初期の頃の使用が最も多く、*Sonnets* に 4 回現れるほか、第一四部作史劇に 4 回使われる。そしてこの語と「目」のむすびつきは Shakespeare の処女作から明らかな形で出てくる。

Son. And on my side it is so well apparell'd,
So clear, so shining, and so evident,
That it will glimmer through a blindman's eye.

Plan. Since you are *tongue-tied* and so loath to speak,
In dumb significant proclaim your thoughts:

(1H6, II. iv. 22-26)

この部分の直前で Richard Plantagenet もこの Somerset とほぼ同様のことを言うので、

eye がもうひとつ、それ以外にも 15 行に *eye* がひとつと集中する。そして、“purblind”, “side”, “find” 等の語を Plantagenet が使う。“shining” と考えあわせて筆者にとって興味深いのは、このすべてに共通する [ai] 音の問題、assonance の問題である。Shakespeare の作品で次に登場する *tongue-tied* は 3H6 で、ここにも *eye* 以外に *side*, *ride* 等の単語が現れる。その作品の中で *ride* はそこにしか出てこない。

こういった [ai] 音のことを *Sonnets* に応用してどうということがわかってくるだろうか。ひとつ興味深い話題は、ソネットに使われる [ai] という音を持つ語の数である。もし、*Sonnets* 内のある単語の連想が、[ai] という音に根ざしているのなら、その音がそのソネットには多く含まれているはずである。その音の多さと、*eye*, *die* 等の出現となにか因果関係はあるのだろうか。

例えば、冒頭のいくつかのソネットをひろってみると、1 番は、[ai] 音が 20 と、とくに多い。これは、*eye*, *die*, *lie* の三者が出てくるので、それによって総計の数が増えたのだと、説明できるが、[ai] 音が多いから *eye* が出現したのか、逆に *eye* が [ai] 音の出現を促したのか、ほんとうのところは、わからないのではないか。筆者はここでむしろ積極的に、[ai] 音の積み重ねが *eye* の出現を促していると仮定してすべての文脈を探ってみる必要を感じる。いずれが先に Shakespeare の連想に浮かんだかはわからないとしても、そういった音韻的な混沌の中に Shakespeare がまず身をおいている、と想像してみることは、興味深いことのように感じる。

冒頭の 10 のソネットをここに示せば、つぎのようになる。

	[ai]				
1	21	eyes	die	lies	times
2	16	eyes		lies	
3	13		die, dies		time, time
4	9				
5	4	eye			time
6	9				times, times, times
7	11	eye, eyes	diest		
8	11				
9	12	eye, eyes	die		
10	15				

ここから、筆者は二つの点を指摘したい。まず、(1) 1 番のソネットには、[ai] 音の数が多いということ。ここには四者の単語が出揃うが、これはたとえば 3 番や 6 番の場合とは基本的に状況が異なっている。つまり、同じ単語を繰り返すときの精神状態と、韻という共通点をもった違う単語を使うときの精神状態で、どちらが言語的に敏感であると言えるだろうか。言語的に非常に敏感になったときの Shakespeare の意識的・無意識的に同じ響きの語をかき集め

る才能は、普段の倍以上に働くと言えるようだ。さらに指摘したい点は、(2) *eye* がなくても [ai] 音の多いものがある、ということである。そこで、上の表の5番と、10番あるいは8番を比較してみてほしい。前者には *eye* が現れるのに、[ai] 音が極端に少ない。*eye* があってもなくてもひとつのソネット内で使用される [ai] 音を含む単語の数を平均して10ぐらいであるとしてみても、この5番はこれ以外に *tyrants* があるのみである。(因に *tyrants* は *Sonnets* 全体でここだけ、また3例ある *tyrant* も1例を除いて *eye* と同じソネット内にある。)

このように、[ai] 音が極端に多かったり少なかったりするの、周囲に影響されてのことだろうか、それとも、単なる偶然なのだろうか。そういったことはやはり細かく見ていく必要を感じるので、以下に表を提示する。ソネット番号に続く数字は、[ai] 音の数である。表でイタリックになっているソネット番号は [ai] 音の多いもの、ボールドは少ないものである。また、*eye* のあるソネットは下線を引く。また、当時の発音については、注参照。⁵⁾

- 1 12 *desire* (1), *therby*, *might*, *die* (2), *riper*, *by*, *time* (3), *might*, *memory* (4), *thine*, *bright*, *eyes* (5), *thy*, *light's* (6), *lies* (7), *Thyself*, *thy*, *thy* (8), *thine*, *thy* (11), *by* (14).
- 2 16 *thy* (1), *thy* (2), *Thy* (3), *thy*, *lies* (5), *thy* (6), *thine*, *eyes* (7), *thy* (9), *child*, *mine* (10), *my*, *my* (11), *by*, *thine* (12), *thy* (14).
- 3 13 *thy* (1), *time* (2), *beguile* (3), *thy* (6), *thy* (9), *prime* (10), *thine* (11), *Despite*, *thy*, *time* (12), *Die*, *thine*, *dies* (14).
- 4 9 *why* (1), *thysself*, *thy* (2), *why* (5), *why* (7), *thysself* (9), *thysself*, *thy* (10), *Thy* (13).
- 5 4 *eye* (2), *tyrants* (3), *time* (5), *quite* (7).
- 6 9 *thy* (2), *vial* (3), *thysself* (7), *times* (8), *times*, *thysself* (9), *thine*, *times* (10), *thine* (14).
- 7 11 *light* (1), *eye* (2), *sight* (3), *majesty* (4), *climb'd* (5), *highmost* (9), *Like* (10), *eyes* (11), *thysself*, *thy* (13), *dies* (14).
- 8 11 *why* (1), *delights* (2), *Why* (3), *thine* (4), *By*, *thine* (6), *chide* (7), *Strikes*, *by* (10), *sire*, *child* (11).
- 9 12 *eye* (1), *thysself*, *life* (2), *die* (3), *like*, *wife* (4), *thy* (5), *behind* (6), *private* (7), *By*, *eyes*, *mind* (8).
- 10 15 *deny* (1), *thysself* (2), *thysself*, *conspire* (6), *thy*, *desire* (8), *thy*, *I*, *my*, *mind* (9), *thy*, *kind* (11), *thysself*, *kind-hearted* (12), *thine* (14).

ここまでで気がついたことを確認したいが、*thy*, *thine*, *thysself*, *my* 等の語が非常に多いようである。とりあえずこの繰り返しを消し去ってみると、数字はどう変わるだろうか。

- 1 14 *desire* (1), *thereby*, *might*, *die* (2), *riper*, *by*, *time* (3), *might*, *memory* (4), *bright*, *eyes* (5), *light's* (6), *lies* (7), *by* (14).
- 2 4 *lies* (5), *eyes* (7), *child* (10), *by* (12).
- 3 7 *time* (2), *beguile* (3), *prime* (10), *Despite*, *time* (12), *Die*, *dies* (14).
- 4 3 *why* (1), *why* (5), *why* (7).
- 5 4 *eye* (2), *tyrants* (3), *time* (5), *quite* (7).⁶⁾

- 6 4 vial (3), times (8), times (9), times (10).
 7 9 light (1), eye (2), sight (3), majesty (4), climb'd (5), highmost (9), Like (10), eyes (11), dies (14).
 8 9 why (1), delights (2), Why (3), By (6), chide (7), Strikes, by (10), sire, child (11).
 9 10 eye (1) life (2), die (3), like, wife (4), behind (6), private (7), By, eyes, mind (8).
 10 6 deny (1), conspire (6), desire (8), mind (9), kind (11), kind-hearted (12).

今の操作で大きく数字が変わったのは、2, 4, 10 番ソネットである。大きい変化のないのは、7, 8, 9 番である。そして、7, 9 番には *eye* が二回づつ使われているのである。さらに言うと、*die* が出るソネットは 1, 3, 7, 9 番で、それらは、*thy*, *thine* 等の頻度が少い。

以上のことから、筆者が導き出したい仮説は、*eye* や *die* 等が現れるときには、なるべく多くの韻をまわりに呼び集めようという意志が Shakespeare に働いていた、ということなのである。

形を変えた言い方をしてみよう。今の操作で *thy* 等を消し去った後、残りの単語の数が一番少ないのは、2, 4, 5, 6 番であり、2 を除いて、これらには文末に [ai] 音が来ることはない、すなわち、これらは [ai] 音で実際の韻を結ばないが、これらの残された単語をよく見ていると、4 番は *why* のくりかえし、6 番は *times* のくりかえしにすぎないのである。ということは、4 番には、*why* と *thy* の、5 番には、*times* と *thy* のくりかえしが [ai] 音の数を増やしているだけで、パターンとしてはそれぞれの二語の変形しかないのだ。つまり、4 番、5 番に残される単語は水平化され、それぞれ 1, 2 個になってしまう。そして、2, 4, 5, 6 番の中で、少ないながらももっとも変化に富む単語をかかえている 2, 5 番には、*eye* が出現する。筆者が証明したいのは、そういった *eye* の力、さまざまな語を引き付けようとする *eye* の韻の力なのである。

eye も *die* も出ないものを探ってみると、8 番には、*why* と *by* が二回づつ出る。9 番の *kind-hearted* は *kind* の変形に思える。(因に、*conspire-desire*, *mind-kind* は押韻している。)

3 番には *die* が出るが、*time* も二回出る。1 番には *might* と *by* が二回づつ出る。また、*thereby* と *by* との共通性を感じる。以上総合してみると、繰り返しを含めないで、単語の出る数字は次のように訂正した方がよさそうである。ついでに [ai] 音で押韻する語を付す。

1	11	die-memory, eyes-lies
2	4	lies-eyes, mine-thine
3	5	prime-time
4	1	
5	4	
6	2	
7	8	light-sight, eye-majesty
8	7	

9	9	eye-die, life-wife, behind-mind
10	5	conspire-desire, mind-kind

数字の多いソネットに *eye* が見られ、少ないものには *eye* は現れないのは、単に偶然なのだろうか。さらに、*eye* は必ずと言っていいほど文末に出てくる、つまり韻を踏むことに参加するのである。まとめてみると、*eye* の現れるソネット内には、同じ響きをもった違う単語が多く見られ、*eye* はしばしばそのソネット内での押韻の役を引き受ける。つまり *eye* の [ai] 音の特徴が重要な役割をしているとみられる現象が多く観察されるのである。

ともあれ、もう少し先まで [ai] 音を追ってよもう。ソネットが先に進むに従って、いまいったようなことは変化してくるのか、それとも全体的に観察できることなのか。以下が 11 番以降の [ai] 音である。

- 11 6 thine (2), thine (4), minded, times (7), teereby (13), die (14).
 12 15 I, time (1), night (2), I, violet, prime (3), white (4), I (5), white (8), thy, I (9), time (10), die (12), Time's, scythe (13).
 13 2 Find (6), might (10).
 14 18 I, my (1), I (2), I (5), wind (6),⁶⁾ By, I, find (8), thine, eyes, my, I, derive (9), I (10), thrive (11), thyself (12), I (13), Thy (14).
 15 12 I (1), I (5), by, sky (6), height (7), memory (8), my, sight (10), Time (11), night (12), Time (13), I (14).
 16 14 mightier (1), tyrant, Time (2), my, rhyme (4), liker (8), lines, life, life (9), time's, my (10), Neither (11), eyes (12), by (14).
 17 16 time (1), high (2), hides, life (4), I, write, eyes (5), lies (7), my (9), like (10), rights (11), child, alive, time (13), my, rhyme (14).
 18 11 I (1), Sometime, eye, shines (5), declines (7), By (8), thy (9), lines, time (12), eyes (13), life (14).
 19 18 Time, lion's (1), tiger's (2), Time (6), wide (7), I, crime (8), thy, my (9), lines, thine (10), thy (11), thy, Time, despite, thy (13), My, my (14).
 20 10 my (2), eye, bright (5), eyes (8), by (11), By, my (12), Mine, thy, thy (14).

さきほどと同じ操作で *thy*, *my* 等を消してみる。

- 11 4 minded, times (7), thereby (13), die (14).
 12 10 time (1), night (2), violet, prime (3), white (4), white (8), time (10), die (12), Time's scythe (13).
 13 2 Find (6), might (10).
 14 6 wind (6), By, find (8), eyes, derive (9), thrive (11).
 15 8 by, sky (6), height (7), memory (8), sight (10), Time (11), night (12), Time (13).
 16 12 mightier (1), tyrant, Time (2), rhyme (4), liker (8), lines, life, life (9), time's (10), Neither (11), eyes (12), by (14).
 17 13 time (1), high (2), hides, life (4), write, eyes (5), lies (7), like (10), rights (11), child, alive, time (13), rhyme (14).

- 18 9 Sometime, eye, shines (5), declines (7), By (8), lines, time (12), eyes (13), life (14).
 19 9 Time, lion's (1), tiger's (2), Time (6), wide (7), crime (8), lines (10), Time, despite (13).
 20 5 eye, bright (5), eyes (8), by (11), By (12).

さらに内部を見よう。time, by 等繰り返しが多いが、すべての繰り返しを考えに入れないと、つぎのようになる。

- 11 4 minded, times (7), thereby (13), die (14).
 12 7 time (1), night (2), violet, prime (3), white (4), die (12), scythe (13).
 13 2 Find (6), might (10).
 14 6 wind (6), By, find (8), eyes, derive (9), thrive (11).
 15 7 by, sky (6), height (7), memory (8), sight (10), Time (11), night (12).
 16 10 mightier (1), tyrant, Time (2), rhyme (4), liker (8), lines, life (9), Neither (11), eyes (12), by (14).
 17 13 time (1), high (2), hides, life (4), write, eyes (5), lies (7), like (10), rights (11), child, alive, time (13), rhyme (14).
 18 8 Sometime, eye, shines (5), declines (7), By (8), lines, time (12), life (14).
 19 7 Time, lion's (1), tiger's (2), wide (7), crime (8), lines (10), despite (13).
 20 3 eye, bright (5), by (11).

さほど変化のないのが、13, 16, 17, 18 番、大きく変化したのが、12, 14, 19, 20 番である。16~18 番は、eye が現れるということで説明がつくが、14, 20 番は、中に eye があるのに、それでも [ai] 音の語があらわれることが少ない。どうしてだろう。また、12, 19 は eye がないのに [ai] 音が多い。それもどうしてなのか。各ソネットの実際に押韻する語を調べると、面白いことがわかる。[ai] 音で押韻するものを挙げてみる。

ただしここでの「[ai] の種類」とは、my, thy, I 等の人称代名詞を除いた数、すなわちさきほどの操作ででてきた数字である。

	[ai] の数	[ai] の種類	押 韻
11	6	4	thereby-die
12	15	7	time-prime, night-white
13	2	2	
14	18	6	wind-find, derive-thrive
15	12	7	sky-memory, sight-night
16	13	10	Time-rhyme
17	16	13	<u>eyes</u> -lies, time-rhyme
18	11	8	shines-declines
19	18	7	Time-crime
20	10	3	

[ai] 音が多く現れ、そしてその種類も豊富な 17 番では、実際に eye が押韻に参加する。すな

わち、eye という語の音韻に強く注意を引かれる場合に Shakespeare は [ai] という音を様々な形で発想していたらしい。反対に、14, 20 番など、[ai] の数としては多いがその種類が少ないときには eye は存在しても押韻に参加しない。このように eye という言葉には、意味的側面、音韻的側面との両面があり、その片側の音韻面にだけ注意が注がれているときのみ、今言ったような現象が観察されるのではあるまいか。14 番の [ai] 種類が 6 個まで落ち込んだのは、押韻する語がまったく別の単語になったことによって eye が本来持っていた韻の力が、その語に移り、eye の持っていた音韻性が軽くなったからではないだろうか。また、16, 17, 18 番では time という語が頻出するが、14, 20 番にはひとつもない。1.1.4.において検証したような eye と time の深い関わりを思い返してみると、これは何か今の問題に付随した示唆を与えているようだ。総合してみると、たとえば、14, 20 番のように eye の存在にもかかわらず [ai] 音の種類の貧困があるのは、そのときの Shakespeare が eye の音声面に注意を払わなかったからだ、という言い方になると思う。

先に進もう。

- 21 7 by (2), write (9), my (10), child, bright (11), like (13), I (14).
 22 18 My, I (1), time's, I (3), I, my (4), my (6), thy, thine (7), I (8), thyself (9), I, myself (10), thy, I (11), thy, mine (13), thine (14).
 23 11 besides (2), I (5), [rite] (6), mine (7), mine, might (8), my (9), my (10), silent (13), eyes, fine (14).
 24 19 Mine, eye (1), Thy, my (2), My (3), find, lies (6), my (7), thine, eyes (8), eyes, eye (9), Mine, eyes, thy, thine (10), my (11), Delights (12), eyes (13).
 25 13 titles (2), Whilst, I, triumph (3), I (4), eye (6), pride, lies (7), die (8), [fight] (9), quite (11), I (13), I (14).
 26 16 my (1), Thy, my (2), I (3), my (4), mine (5), I, thine (7), thy (8), guides, my (9), my (11), [thy] (12), I, I (13), my (13).
 27 31 I, my (1), tired (2), my (3), my, mind, expired (4), my, I, abide (5), my, eyelids, wide (7), blind (8), my, sight (9), [thy], my, sightless (10), like, night (11), night (12), by, my, by, night, my, mind (13), myself, quiet, find (14).
 28 19 I, plight (1), by, night (3), by, night, night, by (4), by (7), [either's] (5), I (8), I, bright (9), I, night (11), twine (12), my (13), night, nightly (14).
 29 22 eyes (1), I, my (2), my, cries (3), myself, my (4), like (5), like, like (6), Desiring (7), I (8), myself, despising (9), I, my (10), Like, arising (11), thy, brings (13), I, my (14).
 30 14 silent (1), I (2), I, sign, I (3), time's (4), I, eye (5), night (6), sight (8), I (9), I (12), while, I (13).

人称代名詞を除き、繰り返しを数えないと、それぞれのソネットの [ai] 音の種類は、

- 21 5 by (2), write (9), child, bright (11), like (13).
 22 1 time's (3).

23	6	besides (2), [rite] (6), might (8), silent (13), <u>eyes</u> , fine (14).
24	4	<u>eye</u> (1), find, lies (6), Delights (12).
25	9	titles (2), Whilst, triumph (3), <u>eye</u> (6), pride, lies (7), die (8), [fight] (9), quite (11).
26	1	guides (9).
27	12	tired (2), mind, expired (4), abide (5), <u>eyelids</u> , wide (7), blind (8), sight (9), like, night (11), quiet, find (14).
28	5	plight (1), by, night (3), [either's] (5), bright (9).
29	7	<u>eyes</u> (1), cries (3), like (5), Desiring (7), despising (9), arising (11), brings (13).
30	7	silent (1), sigh (3), time's (4), <u>eye</u> (5), night (6), sight (8), while (13).

22番と26番の [ai] 音はほとんど人称代名詞であったわけで、それを除くと両方ともひとつしか残らない。そして22番にも26番にも *eye* は出てこない。[ai] 音の種類が多いソネットには *eye* が存在する。次に挙げるのが、それぞれの [ai] による押韻である。

21	5	write-bright
22	1	
23	6	[rite]-might
24	4	lies- <u>eyes</u>
25	9	<u>eye</u> -die, [fight]-quite
26	1	mine-thine
27	12	tired-expired, abide-wide, sight-night, mind-find
28	5	plight-night, bright-night
29	7	<u>eyes</u> -cries, despising-arising
30	7	night-sight

27番の押韻が一番多くて、22番にはひとつもないことが注目されよう。22番は [ai] 音自体は18個と多かったが、その実質はほとんど人称代名詞だった。つまり Shakespeare は22番のソネットでは、その [ai] を含む多くの語を音声的注意を払わずに使用しているわけであり、その精神状態は、27番におけるときのように、[ai] 音の韻をさがしている状態とは非常に異なっていると考えられる。そういったことが結果として [ai] 音を持つ語の種類に反映してくるわけである。[ai] 音の種類が豊富だということは、そのときの Shakespeare の発声的関心のありようを示す証拠と考えられる。

(以下続稿)

注

- 1) シェイクスピアからの引用は、*The Riverside Shakespeare*, gen. ed. G. Blakemore Evans, et al. (Boston: Houghton Mifflin, 1974) に拠る。なお、シェイクスピア劇の題名の省略形は、Spevack の concordance に従う。
- 2) C. Spurgeon, *Shakespeare's Imagery* (1935; rpt. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1977), pp. 191-92.
- 3) Spurgeon, p. 193.

